
Lv20

mori

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L V 2 0

【NZコード】

N 8 1 6 7 Y

【作者名】

m o r i

【あらすじ】

しゃが20までしか上がりない、勇者にはなれない主人公が勇者や仲間と共に魔王討伐を目指すお話です。主人公の戦い方はむしろFFよりになるかもしれません。重い話はきっと最初の方だけのハズ。

第一話（前書き）

初めての作品です。
誤字脱字、駄文等あるでしょうが完結を目指していくのでよろしくお
願いします。

第一話

誰だつて一度は「主人公」に憧れたことがあるだろ？
一国一城の主となる「王様」。

世界を股にかけ未知の秘境や宝を探しだす「冒険家」。
魔物はびこる城にて運命の相手を待ちわびる「お姫様」。

そして魔物より姫を救い出し、世界を平和へと導く「勇者」。

きっと誰もが自分もこうなつてみたいと夢を見る。

しかし人生を生きていく中で自分の力を知り、妥協点を見つけていく。

そしてその中で幸せを掴んでいく。
それは当然のこと、だつて誰もが「主人公」になれるわけではない
のだから。

ここはとある城下町の一角にある民家。
今まさにここで新しい命が産まれようとしていた。

……おぎやあ……おぎやあ……

バンッ！…という勢いの良い音と共にドアが開かれる。

「産まれたか！レイ！」

青いバンダナを巻いた青年がベッドに横たわる女性に声をかける。

「ええ、無事に産まれたわあなた～…。」

「やうひかー頑張ったなー！」

それを聞いた青年は妻に抱きつきたい衝動に駆られるが、さすがに出産直後にそれはまずいだろうと思ふ留まる。

ふと田をやると部屋の机の上で産婆の手により産湯に浸かる我が子を見つける、近づいていくと産婆は青年に気づき笑顔で声をかける。

「元気な男の子ですよ、レイさんも健康そのものです。」

「ああ、ありがとう！助かったよ婆さん。」

やがて赤ん坊、妻に対する処置も終わり産婆が帰つていった。部屋に残つたのは青年とその妻、そしてその2人の愛の結晶のみ。母に抱かれ眠るわが子を見ながら青年は立ち上がり言つた。

「お前どこの子はどうなことがあつても、絶対に守つてみせぬー。」

「あらあら別に危険なわけでもないのにー、でも嬉しいわ、うふふ、それで名前は決めているのー？」

夫の言葉に頬を染めながらも嬉しそうな顔で妻は答える。

「やうひん決めてるわ、この子の名前は…」

これが後の世に魔王を打倒する勇者.. の仲間であり、
自分の力を決して諦めなかつた一人の人間の物語のはじまりの日で
ある。

第一話

「ふう……」

日課となっている走り込みを終えて、汗を拭きつつ家に向かう。

ここは世界の南に位置する大陸にある城、アリアハン。かつては全ての大陸を支配する大国であつたが、過去に起きた戦争が原因で現在は他国との交流を絶つているらしい。

その城下町の外れにある民家、表札には「ロック&レイ&・ウィル」と書いてある。

「ただいまー。」

「あら~おかえりなさいウイル、パパを起こしてきてくれない? 朝ごはんにしましょ~。」

そう言われて俺は寝室へ向かう。

そこにはもう年齢はおっさんなのに青年にしか見えない男が一人。ありえない寝相で幸せそうな顔をして寝ている。

「父さん、朝ごはんの時間だよ、起きて。」

「う~ん…あいつに報酬を渡すまえに脱出するわけには……」

訳のわからない寝言を言つて一向に起きる気配がない。大きな声を出しても搖すつても全く起きない、はあ…仕方ない、あの方法で行くか。

「あーあそこにまだ見ぬお宝「ジジだー」あ、起きた。」

ガバアツーと今まで爆睡していたにも関わらず勢い良く跳ね起きる。

「父さんおはよー、もひーはんの時間だから、母さんも待ってるよ。

「

あ、あれ…？おまは…？あいつは…？と寝ぼけている父さんをおいて居間に向かう。

食卓にはすでにトースト、サラダ、スープなど色とりどりの朝食が用意してあった。

母さんはすでに椅子に座つて待つていて、あとは父さんが来るのを待つだけだ。

それにもしても母さんも年齢的には父さんと同じはずなのに見た目は少女そのもの、街で姉弟に間違われたこともある、我が両親ながら一体この二人は何者なんだろうか？

「どうしたの～？ぼーっとして？」

い、いや、なんでもないよと席に着く。心を読まれたら困るからな。この前うつかり口が滑つて年齢の話をしたらすごい笑顔で「体にいいのよ～」

と苦せが限界突破したスープを飲ませた時は心から後悔した。少しして父さんも席につき、3人で手をあわせて唱和する。

「いただきます。」

なんでも父さんが以前東の国に旅をした時そこでの風習であつたそ
うで、
命をいただく際の礼儀、といふことで我が家でも行なつている。

「今日もレイの飯はうまこなー！ 一日の活力だ！」

「つぶつぶー、そつ言ひてもりあると作りがいがあるわー。」

と、いただきますと礼儀よくはじめた割にはすゞしく勢いで朝食を平
らげる父と、
それをこじこと嬉しそうに見つめながら食べる母、マイペースで
食す自分。
結婚してからもう一〇年以上経つのこの二人、未だにラブランプで
ある。
食事が終了すると伸び手をあわせて喧和する。

「うれしかったまでした。」

これも東の国風習で、感謝の気持ちを表すそつだ。
食器を片付けてくると父さんが「準備ができたら外にいこよ。」と
言つて出ていく。

少しは自分で片付けなよと思いつながらも父さんの分も片付け、
母さんに行つてきますとつて外出ていく。

これがいつも我が家家の朝なのである。

第一話（後書き）

とつあべす日常。

第三話（前書き）

かよひとシリーズ？

この世界には「加護」といわれるものがある。なんでも生まれながらにして神から授かる力らしく、その力によつて身体能力の強化、呪文と呼ばれる奇跡を使うことができる。

「加護」は魔物と戦うことでのみ経験をつむことができ、一定の経験をつむことで「加護」の力が強まり、より強い力を得ることができる。

しかしながらこの「加護」は全てのものに等しく…なんてことはなく、しつかりと個体差があるのである。それを昔々にどこぞの学者が発見し、「加護」の強さを最大 L^V という概念で設定した。

そしてそれは「加護」の強さがその人間の強さの素質であるという風習を定着させた。

産まれたときに最大 L^V を測定し、その子が戦うことが出来るかを見極められるのである。

もちろん加護の力がなくても日常生活を送るのになんら不便はない、あくまで魔物と戦うための超人的な力を手に入れるための手段なのである。

一般的な人で大体最大 L^V 60～70、素質の高い人で最大 L^V 80前後。

最大 L^V が90を超える人はほとんどおらず、いわゆる「英雄」の資質を持つ人達である。

そんな中今も世界的に有名な冒険家である父ロック。

元魔法使いにして各方面に音に聞こえた研究者であった母レイ。

最大レバ96と最大レバ88の間に生まれた息子である俺ウイルは

周囲の期待も大きかつたらしい。

国王の前での最大レバ測定には多くの人々が注目していた。

しかし結果は思わず国王でさえ絶句してしまうものとなってしまう。

「レバ…20…？」

誰ともなくそつとぶやいた、そつ、俺は「加護」の力が極端に弱かつたのである。

低い人でもレバ50はあるであろう「加護」が今までにない低さだつたのだ。

当然の「」とく周りからは「かわいそうに…」とか「残念でしたな…」との声が上がり、

国王からも「あまり気にやまないよう」慰めの言葉が出た。しかし父ロックは大声で言い放った。

「別にあんたたちの慰めの言葉も同情の言葉もいらない!…どんなことがあろうともこの子は俺たちの子供に変わりはなく、そこに「加護」の力は関係ない!」

母レイがそれに続く。

「そうですよ~、ウイルは私達の息子、それは神にすら変えられない。それに「加護」の力が全てではないですからね~。」

一人にそう言われた人達は何も言い返すことが出来ず、帰つていく夫婦を見送った。

しかしこの測定は多数の人に見られていた為にすぐに話が広まる」とになった。

「ロックとレイの息子ウイルは最大Lvが20しかない」

そのせいか昔から俺は周囲の子供たちにはいじめられ、大人達からは同情の視線を向けられて生活することになった。お使いで街に出れば、

「やーい、お前弱いんだってなーー」「（ヒンヒソ…）『両親はあんなに立派なのにねえ。』

と罵詈雑言のオンパレード、当然友達など出来ず一人でいることが多かった。

偉大な両親に不釣り合いな自分、どうして自分はこんなに弱いんだろう?なんで自分はこんな思いをしなければならないんだろう?そんな葛藤を感じていた時に言われた一言。

「お前本当はあの二人の子供じゃないんじゃねーのか!」

当時の俺にはその言葉が心に強く突き刺さった。そんなことはない、と自分に言い聞かせながらもじわじわと広がっていく不安。でも自分はこんなに弱いし、もしかしたらそうなのかも不安が疑念を呼び、とうとう両親に聞いてしまった。

「ねえ?本当に僕はお父さんとお母さんの息子なの?もし違うのなら正直に…」

とまで言つたところで頬に強い衝撃を感じると共に自分が吹き飛んでこることに気づく。

「どうやら父さんに殴られ、壁に体を打ち付けたようで、鈍い痛みを感じながら薄れゆく視界の先に怒つた顔の父と涙目の中を捉えながら意識を失つた。

どれだけの時間が経つたのかはわからないが、目を覚ました時まず目に入ったのが母さんの顔だつた、どうやら膝枕されていたらし。

「やつと目を覚ましたわね、パパのはやりすぎだとは思うけどそれも仕方ないこと、それだけ怒つていたことよ。」

あんなことを言つてしまつた後だ、今更どんな顔をしていいかわからず思わず母さんから目をそらす。ふと部屋の隅に目をやると正座して首から『反省中』の札をぶら下げている父さんがいた。
『どうやら母さんからお仕置きされているらしい』と思つていると急に『やめやめ』と抱きしめられた。

「ウイル…周りがなんと言おうともあなたは私達の息子、それだけは疑わないで、そんな悲しい事を私たちに言わせないで…」

ふるえる声で俺を抱きしめながら言つた。
父さんも俺の目を見ながら言つた。

「母さんの言つとおりだー周りの目なんか気にするなーたとえ世界が敵に回つたつてお前を、お前たちを守つてみせるー」

そんな父さんに、正座してなければかつてのこと思いながらも、父と母の言葉に、嬉しさがこみ上げ、次に両親を少しでも疑つてしまつた自分が恥ずかしく大声で泣きながら謝つた。

そしてこの一人にの間に生まれたことを誇りに思つた。

どんなことがあっても二人は自分の味方でいてくれる、そう思うだけで強くなれる気がした。

それからは何か言われても気にならなくなつた、自分の中に揺るがないものがあるから。

そうなると周りは興味を失うのか次第にいじめなどもなくなつていった、友達は相変わらずいなかつたが。

その頃から俺は父さんに戦い方を習うことにして、しゃだけが強さではないということを自分の力で証明したかったのだ。

もちろん父さんは二つ返事で了承、パパだけずるいーと母さんからも炊事洗濯や

研究者であつた時に培つた知識、技術などを教えてもらひつことになつた。

そういうえばその生活になればじめた時だつたな、あいつと出会つたのは…

第三話（後書き）

次回勇者が出ます。

第四話（前書き）

まだひとつシリアルアス？

それは両親から様々な技術を習つてゐるある日のことだった。

父さんは戦闘もこなすが、基本的にはとうぞく（本人はトレジャー・ハンターと言つてゐる）なので、どちらかと言えば宝を探したり、敵から物をかすめ取る方が得意である。

ちなみにとうぞくが「加護」によつて覚えることのできる呪文はフローミヒレーラーマの2種類である。

フローミヒは自分の現在地の名称と階層を知ることができるもの。レーフリーマは周囲に落ちてゐる宝を発見することができる呪文である。

ぶつちやけ戦闘には全く役に立たないがフローミヒは地図と併用すれば迷子になりづらくなるし、レーラーマは小銭を拾い集めたりするのに役立つそうだ。

そんなことを白慢気に語る父さん、なんといつか…有名な冒険家なのにみみつちござ。

しかも迷子つて…そういえばこの前北は上、南は下とか言つてたような気がする、うん、忘れよう。

母さんいわくレーラーマは「→」で覚えられるので限界まで鍛えれば俺でも覚えられるそうだ。

ただしかしこれによつて前後するため勉強は欠かさないほうがいいと言われている。

父さんは「→」で覚えたと言つていたがもしかしなくとも父さんはバカなのか？

なんてことをうつかり口走ってしまったのが運の刃が、いこ笑顔の父さん、「

「今日はこの花を探してきてもらおうかな！」

と図鑑で初めて見る花を探していくよ、言われた。

どこに咲いているかなどは全く教えてくれず、漠然としての近辺にあるとしか言ってくれなかつた。

かしこいウイルなら俺の力なんぞなくとも探し当てるだらう！

と完全に根に持っているようである。みみっちー…。

まあここらにあるならそんなに苦労しなくても見つけられるだらう、と探索に向かつた。

「完全に甘く見ていた…」

外はすでに夕暮れ時、朝一番で出かけた俺は自分の見通しの甘さを嘆いていた。

花は確かにそこまで遠くない場所にあり、昼前には見つけることができた。

ただ咲いていた場所が問題だつた。

「まさか崖の中腹にあるとは」

そり、そこまで断崖ではないが崖の途中にひつそりと咲いていたのだ。

もちろん上から飛び降りて見事着地！なんて訳にはいかない。

うつかり失敗すれば怪我だつてするし下手すれば命が危ない。

どんな高いところから落ちてもドシャア！といふ音のみで無傷なのは狩人さんだけだ。

の人達はきっと特殊な訓練を受けているんだ。

仕方なく父さんからもひつたばかりのロープを近くの木に括りつけ
ゆっくり降りていく、

そういうことを見越してロープを渡したに違いない、後で母さんに
報告しよう。

花が咲いているのは2本しかなかつたため、それらを懷に入れ、傷
つけないようにロープを登る。

そのせいで思った以上に時間がかかつてしまつたわけである。今は
家路を急いでいる。

ふとその途中通りがかつた川辺で一人の子供が佇んでいるのを見つ
けた。

別に無視しても良かつたのだが、こんな時間に一人は危ないし、何
故か声をかけなければという気になつた。

「ねえ、君、どうしたの？」

声をかけるとその子は一瞬ビクッとなつたあとこいつを見て、笑顔
で言った。

「ちよつと考え方をしてただけだよー。そういう君は？」

「俺は父さんに頼まれたものを取りに行つてたんだ。」「

お父さんの… そんなんだ…と複雑そうな顔でその子は呟く、氣まず
く思つたのか

君の名前は？と聞いてきたのでウイルだよと言つておいた、ひかりが聞き返すと

「え？ ボクのこと知らないの？ オルテガの息子のボクを？」

なんかいきなりホントに知らないの？ みたいな顔をされたのでちょっとむつときた俺は

「そもそもオルテガが誰かも俺は知らないよ、といつかそんな可愛い顔してるから女の子かと思つてた。」

意趣返しのつもりで言い返してやつた、といつか女の子と思つたのは事実だ。

身長は俺より少し低めで中性的な顔立ち、つややかな黒髪を長めにのばしている、うんやつぱど見ても女だ。

「かわいいって…！ 違うよ！ ボクはれっきとした男だよ！」

頬をうつすら赤くしながらふうっとふくらませて言つた、いよいよ女にしか見えない。

「それよりも君の名前を教えてよ、オルテガとかいう人とは関係なく俺は君の名前を知りたいんだ。」

そういうとその子は大きく目を見開いた後、次第につすらと涙を溜めながら… ってなんで泣く！？

「ボクは… ぐすり… ボクの名前はアリスト… ひっく。」

それから泣いているアリストを慰めながら彼の話を聞いていた。

なんでも彼の父はオルテガといってアリアハン屈指の戦士だつたらしい。

最大レバは97、うちの父さんよりも高かつたらしく、宫廷内にも相手になるものはいなかつたそうだ。

そんな折、魔物たちの動きが活性化した時期があり、原因の解決のためオルテガは一人で調査に向かつた。

そして火山で魔物と戦い帰らぬ人となつたらしい。らしいといふのはあくまで噂だからである。

父がダメならその息子と目を付けられたのがアリストらしく、小さい頃から「オルテガの息子」という肩書きで育つてきた。母、祖父からも「あの人息子、孫」とまるで自分は父の代替品のような扱いを受けていたらしい。

偉大なる英雄の息子として、表面上は立派な「息子」としての自分を演じてきたが、その内はかなり寂しかつたらしい。

そこにいきなりポンと現れた俺が「父とは関係なく君のことを知りたい」と言つたことで心の抑えが壊れたのだろう。何度も急に泣いたりして「ごめんね」と謝つてきていた。でも俺はその時全く別のことを考えていた。

… そうか、こいつは俺と同じなんだ。

俺の場合は両親がいたから孤独を感じても自分を壊さずにすんだ、でもアリストは…？

親にすら自分を見てもうえず、今までそれを誰にも悟られないと生きてきた。

それは想像以上につらかったので、少なくとも子供がするべき」とではない。

だから俺は、アリストを抱きしめながら言った。

「もう泣かないで、君が寂しくなるまで一緒にいてあげるから。

」

少しでも寂しさがなくなるように、自分と同じ思いをさせないために心を込めてそう告げる。

すると今まで泣いていたアリストの涙がぴたつと止まり、顔が赤くなっていた、きつと泣きはらした後だからだろう。とりあえず泣き止んだなら丈夫だと思い体を離す。

「これからは俺と友だちになろう、オルテガの息子じゃない、ひとりのアリストとして、そうだ、さつき採ってきた花、これあげるよ、友達の印だ。」

するとアリストはえつ？この花って…と戸惑いながらこちらを見ながら花の咲くような笑顔で言った。

「うんーこれからよろしくねーウイル！」

時間もすっかり夜になってしまったのでとりあえずアリストと別れた、また明日ね！と言つて。

実は俺にとつても初めての友達だったため内心かなり嬉しかつたりしていた。

ウキウキ気分で家に帰るとそこには鬼が待っていた。

「あら～～ ウィル～ 隨分楽しそうね～、何して遊んでたのかしら～？」

いつもより口調が間延びしている母さんは確實に怒っている、経験がそう告げている。

というか後ろに禍々しいオーラをまとっている、ぶっちゃけチビリ

そうだ。

こうなつたら覚悟を決めるしかないと今日手に入れた花を前に出し
ながら、

「あんなやつ……」「少しだけをゆるして貰いたい」

と言つた。もうどうでもなれー！

すると感じていた威圧感が薄れ、恐る恐る顔を上げるとそこには満面の笑みの母さんが。

「私がこの花大好きなの知つてたの？嬉しいわ？」

なんとか俺は今日も生き残れそうである。

「でもいくら母さんのためとはいえるんまり危ないことしちゃダメよ。さて、パパ？ 確かこの花って崖に咲いてたわよね？ なんでウイルが持つてくるのかしら？ え？ ウイルが勝手に行つたって？ じゃあウイルの持つてるパパのロープはなんのかしら？ ウイル？ そのロープ貸してくれない？ じゃあパパ行きましょうか、え、どこに？ うふふ。」

そう言って母さんに連れて行かれる父さん、俺は何も見ていない。

今日は色々と疲れたし、早く寝て明日に備えよう！

第四話（後書き）

狩人さんは架空の存在です。

第五話（前書き）

まだシリアス気味かも…

ボクの名前はアリスト、偉大なる英雄「オルテガ」の息子だ。小さい時からそつだつた、ビリ」といつても誰と話しても必ず、

「オルテガの息子」

といつフレーズがついてくる。

お母さんやおじいちゃんでさえも

「あの人息子、あいつの息子でわしの孫」

と曰に何度も言い聞かせるようにボクに言つてくれる。
でもボクの名前は呼んでくれない、最後に名前を呼んでくれたのは
いつだろ? いつ?

ボクにはあまりお父さんの記憶といつのがない、小さい時にいなく
なつてしまつたから。
正直に言つとパンツ一丁にマントのむねぐるしおつねんぐりこの
印象しかない。

だつて会話もほとんどしたことがないから。

一度だけお父さんと一緒に街に出かけたことがある、断片的にしか
思い出せないけれど。

その時も覚えているのは周りの人達がボクを「オルテガの息子」と
しか見ていなかつたこと。

ただお父さんの顔がずっとバツの悪そつた表情だったのだけは今も
忘れられない。

そして帰り道にボクを抱き上げていつた言葉。

「お前は…ワシの息子だ、…その前に…であることを忘れるな、例え…なんと…とも。」

あの時お父さんはなんて言つたんだろう?あの時は早く帰りたくてほとんど聞いていなかつた氣がする。すぐ後にお父さんは魔物退治に行って、そのまま帰つて来なかつた。

本当はいけないことだつてわかつてゐるんだけどボクはその時確かに

「嬉しい」と思つてしまつたんだ。

だつてこれでもうお父さんと比べられることはないと思つたから、ボクはアリストとして生きていけると思つたから。でも現実は違つた。

国はお父さんのかわりにボクに白羽の矢を立てた、父のカタキは息子が取るべきだとして。

それからは周囲の目が本格的に「オルテガの息子」としてボクを見るようになつた。でもそれをボクは受け入れた、きっとこれはお父さんがないくなつてもいいと思つた罰なんだと。

だからこれからはお父さんの息子として生きていかなればならないんだと。

でもやつぱり寂しい、その気持ちは変わらない。

寂しさを紛らわせるためによくボクは一人で川辺に佇むことが多くなつた。

一人なら誰にも気を使う必要がないから。

でもそんな時だつた、彼が現れたのは。

その日もいつものように川を見ながらぼーっとしていた。

ここは滅多に人が来ないからお気に入りの場所だ、つたんだけど…

「ねえ、君、どうしたの？」

急に声をかけられてびっくりする、本当は今人と話したくなかった
んだけど、

ボクはオルテガの息子、無視なんてしようものなら周りから何と言
われてしまうかわからない、だからいつもの様に作り笑顔で

「ちょっと考え事をしてただけだよー。そういう君は？」

この時はなんで会話を続けようと思ったかは自分でもわからない、
結果的にそれがいい方向に向かったんだけど。

「俺は父さんに頼まれたものを取りに行つてたんだ。」

その言葉を聞いて思わず顔をしかめてしまう。

こんな時間まで父親に頼まれたことに縛られるなんて、
彼も父のことで苦労してるのかなと今思えば的はずれなことを考
えていた。

流れを変えるために名前を聞いたらウイルと答えてくれた。
逆にボクの名前を聞いてきたので思わず焦ってしまい

「え？ ボクのこと知らないの？ オルテガの息子のボクを？」

と言ってしまった、確かにボクの名前を知っている人は少ないかも
しない、ほとんど聞かれたことがないから、でもみんなボクのこ
とは知ってると思っていた。

すると彼はちょっとむつとした様子で

「そもそもオルテガが誰かも俺は知らないよ、といつかそんな可愛
い顔してるから女の子かと思つてた。」

ええ！？「ここに住んでてお父さんを知らないの！？
といつかボクが女の子って、ええ！？」

色々と驚きすぎて氣が動転していたボクは

「かわいいって…！違うよ！ボクはれっきとした男だよ！」

と演技するのも忘れて素の感情を出してしまった。
でもそんなことを気にするでもなく彼は言った。

「それよりも君の名前を教えてよ、オルテガとかいう人とは関係な
く俺は君の名前を知りたいんだ。」

その言葉を聞いて世界が一瞬止まる、…え？今、なんて言ったの？
ボクの名前を知りたい？お父さんとは関係なく？ボク自身の名前を
…？

ボクに興味を持つてくれた？ボクを知りたいと思つてくれた？
ただ一言アリストだよ、そういえばいいだけのはずなのに、頭がそ
れを理解したときにはもうダメだった、目頭が勝手に熱くなつていき

「ボクは…ぐすつ…ボクの名前はアリスト…ひつぐ。」

気づけば泣いていた。

それから感情を抑えられなくなつたボクは彼に次々と話をした。

自分は偉大な戦士の息子として生まれたこと。

みんな偉大な父だけを見ていて自分を見てくれないこと。

父が帰らぬ人となつてからは「立派な息子」を演じたこと。ずっと寂しかつたことなどを泣きながら、謝りながら。

きっと変なやつだと思つてるよね、鬱陶しいと思われてるんだろうね…

初めてボク自身に興味を持つてくれたつていうだけなのに、勝手に何でも聞いてくれると勘違いして、彼にとつてはどうでもいい話をひたすら話し続ける自分に自己嫌悪を覚えていた。もう少ししたら元に戻るから、そうすればもつひとつ頬と話すこともないだろうから、ちょっとだけ我慢してね。

そう思つていたら急に彼に抱きしめられ、わざやかれた。

「もう泣かないで、君が寂しくなるまで一生そばにいてあげるから。」

今ボクは自分の部屋のベッドの上で寝転んでいる。

机の上には彼が去り際にくれた花、それを見ていると自然と頬が緩む。

ボクにできた初めての友達、「オルテガの息子」ではなくアリストをしてくれる本当の友達…

でもなんでだろう? 友達という言葉がしつくりしない。

こんなに胸はどきどきして顔は熱くなるの?」

でもいいや、明日また会つたら考えよつ。

また明日！彼・・・ウィルが言つた言葉を思い出し布団に入る。

今日はよく眠れそうだ！

花瓶の中の胡蝶蘭の花だけがそんな彼を見ていた。

第五話（後書き）

ウィルのセリフが微妙に違うのはアリストの聞き間違いです。
胡蝶蘭はよくわからないけどとりあえず調べた花言葉w

そして早くもストックが無いのでこれからはでき次第になります。

第六話（前書き）

第一話から第五話までも見やすくなればと少しづつ変えたりしている
のでもう見づらいかもしれません。ご了承ください。

今日も朝から日課となつてゐる走り込み。
ただ今までとは変わつた部分がある。

「おはよー、ウイル！」

「おはよー、アリスト。」

アリストが参加するようになつたのである。
あれから俺たちは一緒に遊ぶよつになり、お互ひを知ることになつた。

もちろん俺が最大で20までしか上がらないことも伝え、
それでも強くなれることを証明するため努力していると云ふると、
何やら考えはじめていたようだが、ある日。

「ボクも参加してもいいかな？」

と聞いてきた。

俺としては一人よりもよっぽど楽しいし、
願つても無いことなので了承したが、なんでもまた理由を聞いてみ
る。

「ウイルのことをもつと知りたいし、守つてあげたいから。」

と嬉しさ半分、複雑さ半分の回答が帰ってきた。

俺に興味を持つてくれるるのは嬉しいのだけれども、
やはり面と向かって弱いと言われているような気がするし、

同じ男として守つてもう一つのことはプライドがあるわけだ。

まあそこは俺が守つてもう一つ必要がないくらいに強くなればいい、とこ'う」と自己完結した。

ちなみにこのアリストさん、「加護」による最大LVを聞いてみたところ、なんと最大LV????らしい。

ということは魔物と戦えば戦うほど強くなる?限界がない?こいつはもしかして「勇者」なんじゃないだろうか?

なんて反則キャラなんだとかすがに嫉妬を覚えたが、アリスト自身はいいやつだし、特にその力で増長するようなこともしない、むしろ、こんな強い力があることに嫌気がさしていたようだ。

それにこればかりは生まれつきなんだから責めるわけにもいかない。

悪いのは全部「加護」だ、うん。俺神様のこと嫌いになりそう。

現時点では魔物との戦闘なんてしていないため特に差はない、むしろ先に訓練をはじめていた俺のほうがちょっと上なくらいだ。

走りこみを終えると家に一旦帰る、もちろんアリストと一緒に。最近は食事もうちでとつていくことが多い。

初めてうちに来た時自分の家はいいのかと聞いたところ、

「鍛錬で出かけるって言えば、さすがはあの人の息子だ、で納得してくれるから。」

と少しだけ寂しそうな笑顔で言った。

なのでそれ以上は問わず、好きなだけ食べていけばいいだけ言っておいた。

最初は両親を多少警戒していたアリストだったが、

「お、初めて見る顔だな！…」うつうつとワイルにも友達ができたか！レイ…今日はめでたい日だ、セキハンを炊くんだ！」

「あらあら～、いらっしゃい、ゆっくりしていってね～、セキハンはないけど腕によりをかけるわね～。」

と、想像以上の歓迎ムードに逆に一瞬引いてしまったらしいが、すぐには打ち解けていた。

てかセキハンて何さ？と聞いたらなんでも東の国でめでたいことがあつた時に作る真っ赤な料理らしい、うまいのかが全くわからん。それにしても父さん東の国好きだなー。

「 いたします。」

会わせる手の数が4つになつた食卓で今日も朝食がはじまる。

本日のメニューはトースト、サラダにくろこじょうと呼ばれるペッソとした風味の香辛料がふんだんに使われたベーコンエッグ。余談だが我が家では割と普通に使われていたこれが、後に國の王が欲しがるほどの貴重品だと知ったときは本氣で驚いたものである。

相変わらずすゞしい勢いで平らげる父とそれをにこにこ嬉しそうに見つめる母。

マイペースに食べる俺、全くもつていつもの光景に今はアリストが加わる。

はじめはくろこじょうの独特的の刺激に驚いていたが、気に入ったのか今はくろこじょうだけつまんで風味を楽しんでいるようだ。

あ、アリスト、そこのジャムひとつ。

「はいどうだ、ウイル。」

ありがとー、やっぱ食事は大勢のほうが楽しいな。

「わうだね、ボクこんなに食事が楽しいなんて感じた」と今までなかつたよ。あ、ウイル、口の横汚れてるよ？」

「あらあら甲斐甲斐しいわね～きっとアリストちゃんはいいお嫁さんになれるわよ～。」

と口の横どころか鼻の頭まで汚れてる父さんの顔を拭きながら言つ母さん、父さん…大かよ…。

そして母さん、前提が間違つてるから、アリストは男だから。出合つて速攻女と勘違いした俺が言えたセリフじやないけど。ほら、アリストもなんか言つてやれよ。

「えー…そ、そんな照れちゃいますよ…それにボクはまだウイルとは…」

照れるなよ、お前自分が女だつて言われてるんだぞ？俺の時は怒つたじゃないか。

後最後のほう聞き取れなかつたんだけどなんて言つたの？

「な、なんでもないよーほら、ちと食べちゃおー。」

とがつつき出すアリスト、それを見ながらヒーと微笑む母、そして早くも外に向かっている父、意味がわからん。あと父さん、食器いい加減片付けようよ…

side レイ

うふふ～、アリストちゃんのウイルを見る目つき、アレは完全に恋する乙女の目ね～。

さすがのロックも気づいたみたいだし～、肝心のウイルは全くわかつてなかつたみたいだけど。

はあ～、あの子も父親似で罪作りな子になりそうね～。

それにしてもアリストちゃんは男の子のはずなのになんでか大丈夫だつて思つちゃつたのよね～。

これはもう女の勘！ てやつかしら～。

まあいざとなつたら本当の家族になつちゃえればいいだけだし、ロックを説得する準備をしておかないとな～。

楽しくなつてきたわ～、うふふ～。

side ロック

うーん、アリストはどうやらウイルを異性として見てくるみたいだな。

思わず言つてしまいそうになつたがレイからオーラを感じて思わず逃げてしまつた。

それにしてても性別の問題はどうするつもりなんだ？
家族として迎えるのは構わんがさすがに嫁にするのはどうかと思つぞ？

まあどうあえずはウイルも気づいていないみたいだし今は置いてい
おくか。

そろそろ冒険の虫がひょきだしてきたなー。

第六話（後書き）

まだまだ冒険に出る気配がない…
しばりくは日常での内容が続くと思います。
冒険を期待されている方には申し訳ないですがもう少しお待ちください。

第七話（前書き）

今までで最長、といつか完全に説明回です。

以前「加護」の力によって呪文が使えるようになることは説明したと思う。

これは魔物を倒し経験を積み、レバが一定の値に達した時、自然と頭の中に使い方が浮かび上がってくるのだそうだ。

だからといってレベルが上がるたびにポンポンと呪文を覚えるわけではない。

村人Aがレベル99になつた所で、畠仕事には役立つかもしれないが所詮は村人、そこまで強くはならないし呪文も覚えない。

では呪文を覚えるにはどうすればいいか、それは教会での特殊な契約が必要となるのである。

16歳になつた時を起点に、以後は好きなタイミングで「じょくぎょう」を選択することができる。その選択したじょくぎょう、つまりは契約の内容によつて神からの「加護」の形が変わる。

呪文は覚えないが肉体の強化が一番強力で、重装備によるパーティの壁となる「せんし」。

せんしよりも攻撃的な強化がされ、特に徒手空拳による戦闘を得意とする「ぶとうか」。

肉体の強化は弱いものの、数多くの呪文による戦闘を行える「まほうつかい」。

神の奇跡の力を最も強く受け、癒しの呪文による補助を長所とする「そうりょ」。

魔物から多くのゴールドを見つけたり、よりよい商品を見抜く目利きが特徴の「じょうにん」。

すばやさによるアイテム奪取や、旅をする上でのさまざまな補助が可能な「とうそく」。
強化はほほないが、行動を起こすたびに別の意味で神が降りやすくなる「あそびにん」。

大きく分けてこの7種類である。

冒険者を目指すものは必ず一度は教会に行き、神の前にて自分の進む道を選ぶ、そこで契約することによって「加護」の力を強くするのである。

契約といつても難しいものではなく、神父の前で宣言し、それを受け取った神父が宣言したものにありがたいお言葉を与え、一枚の紙切れを渡すことで契約が完了する。

この紙切れ、常に所有者の「lv」を示すものであり、魔物との戦いによつて「lv」が上がると書かれている数字が変わるので、自分の「加護」が今どのくらいの強さになつているのかがわかるという仕組みだ。

これは（俺の中ではすでに敵として認識されてる）「lv」の概念を見つけた学者が作ったものらしい、本来なら神父の言葉で契約は完了なのだが、「lv」を知ることができるのは便利なことなので渡すのが慣習化したようだ。紛失すると再配布には10Gかかる、神が直接関与していないものとはいえ教会の方々も人の子ということだ。

少し話がそれてしまつたが、しょくぎょうを選ぶ上で一番気を付けるべきは、一度選択したものを変えることはできない、ということである。

せんしにしたけどやつぱり呪文を使いたいからまほつかいになる

!といつ訳にはいかない。

昔酔っ払ったおっさんが、「30歳を越えた独身男性は皆まほつつかいになる。」と涙ながらに言っていたのを聞いたことがあるが、ただの迷信らしい。ずっとせんしのままだった。

安易に選んでしまつ人も少なくないよつて、結果的に自分の思つていたものと違ひ、こんなはずではなかつた…と戦うことを諦めてしまう人もいるそつだ、なので慎重に考えたまづがいと母さんに言われた。

ちなみに父さんの話によると、世界のとある場所にはダーマという神殿があり、そこではしょくぎょうを変えることができるそつなのだが、しょくぎょうを変えるとレバが強制的に1に戻されてしまつ上に、神殿の場所も結構人の寄り付かないところにあるらしく、現実的な方法ではないらしい。そしてなによりも、

「中途半端でやめるくらになら最初から選ぶなど俺は言いたい！」

父さんはダーマ神殿否定派であるらしく。

俺は父さんと同じといづれくなるつもりである。理由としては戦い方が同じな方が学びやすいと思ったのもあるが、実のところ消去法だつたりする。

まほつつかいは俺では全ての魔法を覚えられないから断念、そういうも同じ理由、何より俺は神にいい印象がない。

あそびにんは論外、なるつものなり母さんが泣く、しょくにんは別に商売がしたいわけではないので却下。

せんしとぶとうかは迷つたのだが、せんしは速さ不足、ぶとうかは装備の軽さなどから選択肢より消えることとなり、一番安定していそうなとうそくを選んだのである。

それは安易な選び方ではないのかと突つ込まれそうだが、自分なりにじっくり考えた末の決定なので問題はない。

さて、呪文は確かに便利であり、強力な手段ではあるが万能ではない。

無限に使用できるわけではないし、ある程度強くならいと呪文も覚えていかない。

肉体の強化も弱く、使える呪文も少ない。

まほうつかいになつた人達が一番初めにぶつかる壁がそれだそうである。

そこで呪文の力を過信しそぎるのは危険だという考え方が広まり、人間は「加護」をもつと有効活用できないかと試行錯誤を重ねた。

そして作り上げたのが「特技」である。

その特徴は「加護」を部分的に強化し、特殊な力を引き出すというところにある。

例えば、現在とうそくにとつて必須スキルと言われているものの中にタ力のめ、とうそくのはな、しのびあしがある。

タ力のめは、視力強化により近くにある建造物を探し当てる特技。

とつそくのはなは嗅覚の強化をし、周囲の宝を察知する特技。
しのびあしは、足元に「加護」の力をまとい、足音を消すことによ
つて魔物に気づかれにくくなる特技。

特技と呪文の大きな違いは、特技は努力さえすれば誰でも覚えられ
るところである。

盗賊の必須スキル3つも、頑張れば他の職業でも習得可能なのであ
る。

しかも習得に「lv」が関係しない、使えるようになるかは本人次第で、
「lv」が上がり、「加護」が強くなれば威力も一緒に上がっていく、と
いつたところである。

もちろん適正、というか覚えやすさはある、タ力のめなんかは同じ
く目がよいしょには覚えやすいが、そうりょあたりは覚えづら
いそうだ。

更に世界には、強い「加護」の力を利用したり、複数の特技を組み
合わせた奥義を使う人達もいると聞いたことがある。これは基本的
に開発した者オリジナルの技になることが多い。

といつのもほとんどの人が使い方を秘匿してしまうため、後に伝わ
らず消えてしまうからだ。確かにせっかく開発した自分だけの技を
他の人にも使われてしまうのは悔しいかもしれない。

さつきは奥義について聞いたことがある、と言つたが、実は父さん
と母さんも奥義持ちだったりする。

父さんは「盗む」を昇華させた「ぶんどる」。

これはどうぞくのはなを魔物に使い宝を持っている相手を特定し、
タ力のめにより宝の位置、魔物の弱点を探し出し、速攻で相手に致
命傷を『えつつのを盗む』といふもので、父さんいわく「別に誰
でも使える」ということなので秘匿はされていないのだが、戦闘中
瞬時にその判断を行えるものはおらず、結果オリジナルの奥義のよ
うな扱いになつてゐる。

母さんは自らが開発した「燃える水」と呼ばれる液体が入った小瓶
を敵に投げつけ、メラによつて発火、爆発させる「ボム」を使う。

当初本人は、「四肢粉碎灼熱爆発地獄火炎瓶」という名前を付けた
そうなのだが、周りの強い反対により変更したらしい。周りの人達
の苦労がうかがい知れる。

もちろんボムもオリジジナルになつてゐる、燃える水の製造技術は母
さんしか知らないし、投げた小瓶にメラを当てる技術など難易度が
高すぎるのである。

二人からそれぞれ奥義を教えると言つてゐた、だがどうぞくはメ
ラが使えない、なのでボムは断つたのだが、

「えへ、いつもパパばっかりずる~い!いいもん、私はアリスト
ちゃんに教えるから~!」

とアリスト強化計画を発動してしまつた。

アリストはしおげきょうとしてまほうつかいになりたいそなうの

だが、レーヴが際限なく上がるならそれを活かしてみればどうだと母さんに言われ、剣士としても戦闘を行えるいわゆる魔法剣士を目指すそつだ。

近接においては剣による戦闘、遠距離においては呪文を使った攻撃、中距離ではボムを雨あられのように降らせ魔物を殲滅するアリスト：想像すればするほど、俺アリストと友達でよかつたと思つ。

「…ふう」

今まで読んでいた本を閉じ、一息つく。あれ？なんかこの始まり方デジヤヴ？

本の表紙を見ると「腐った死体も3日でわかる！初歩の呪文・特技レイ著」と書いてある。

母さんはネーミングセンスがないのか？確かにわかりやすかつたけども。

ここは俺の部屋、本日は勉強の日で、戦う技術は必要だけれども知識がないと応用が効かないということを行なっている。

母さんが書いた本は題名はともかく中身はしっかりしているので読んでおいたほうがいいとは父さんの談。

肝心の本人は直感が服着で歩いているようん人間なので勉強は全くしなかつたらしいが。

ふと横に目をやると机に顔を突つ伏したまま夢の世界に旅立つてゐるアリストを見つける。

「んにゅ～…えへへ、 ウィル～…」

よだれを垂らしながら幸せそうな顔をして眠りこけるアリスト、こいつ実はかなり勉強が苦手である。表紙でまばたきの回数が増え、目次で目がトロンとなり、数ページ読み進めるまもなく意識を失つてしまつ。

未来の魔法戦士がそれでいいのか？てか俺は夢のなかでビリになつているんだ。

そんなことを考えていると扉が開かれ、母さんが入ってきた。

「お茶入れてきたから休憩にしなさい～、つて片方はすっかりお休みみたいね～。…アリストちゃん？」

と言わると急にビクン～と反応し、起き上がるアリスト。

「ん～…、あれ?」「は？」…？

どうやらまだ寝ぼけているようである、体だけが反応するとは、いつたい一人の間に何があつたんだ。

「あれ? ウィル?」「」「？」確かにさつき一人で教会に行つてたはずなんだけど…。」

「まだ寝ぼけてるのか？ずっと俺の部屋で勉強してたじゃないか、主に俺一人が。」

なんだ早くもしょくぎょつ選ぶ夢でも見てたのか？と聞くとえ？あ、うん、そうだよーと顔を真赤にしながら言うアリスト。恥ずかしい夢だったのか？でもお前はもっと田の前の前の問題に早く気づくべきだと思うんだ。

「アリストちゃん、寝る子は育つから寝るなとは言わないけど、時と場所は選ばないとね～。わあ～ちょっとこいつ来ましょうか～。」

母さんを視界に入れ、いつもより間延びしたその言葉を聞くと同時に顔が真っ青になつていくアリスト。

「れ、レイさん！？いえあのこれは違うんです！話を聞いてください！え？聞くからこいつちに来なさいって？い、いやそういう意味じゃなくて！ウイル！助けて！つなにお茶飲みながら遠い田で窓の外見つめてるのさー？お前のことは忘れない？ひ、ひじいよーいたつ！わかりましたレイさん！行きます、行きますからお願ひだから耳引っ張らないでー！」

ウイルの「ひきつけつものー」とこいつ声を最後に部屋を出ていく母さんとアリスト。

一応あいつはよそ様の家の子供のはずなんだが、最近扱いに容赦がないな…強く生きてくれ。

ま、もう本当の家族みたいなもんだし遠慮はなくてもいいことか。

さて、次はなんの本を読もうかな、「あそびにんをけんじゅ」にする
100の方法 レイ著「すじぐどりどもいい内容つぽいけど息抜
かれ」にするか、題名につこつはまつ氣にしたら負けな氣がする。

なんかすり泣く娘が向こうの部屋から聞こえてくるよつな氣がす
るけどさつと空耳に違いない。

そうして俺は再び本を読みはじめるのだった。

第七話（後書き）

とこりわけで説明回でした。できるだけ考えましたがさうと矛盾出てくると思いますのでご了承ください。この小説では特技についてはしょくぎょう固有にはしません。主人公強化できないので。

そして田常書くのが楽しい、なぜバトルありにしてしまったのか。次回はおそらくまたレイさん無双になるきがする…。

第八話（前書き）

今回攻略サイト見ながら書きましたが、間違いありましたら指摘お願いします。

なんで……どうしてこんなことになってしまったんだ…

ここは薄暗い地下室。

周りは全て石造りの壁に囲まれ、陽の光が全く差しこまない部屋の中でロウソクのみが頼りなく揺らめいている。

殺風景な部屋の中にはほとんど物がなく、壁にはロープが数本括りつけてあり、不気味な印象を醸し出している。

そして今俺はこの部屋の中で起った惨劇に圧倒され、体を動かすことも出来ず立ちすくんでいる。

床には俺の父だったもの、そして親友だったものが横たわっている。父ロック、友アリスト。

一人とも少し前までは元気な姿でいつもの生活を過ごしていたはずだったのだが、いまや父は体中をビクンビクンと痙攣させながら白目をむき泡を吹いている。

友はうつぶせの体制のままピクリとも動かない、息はしているのになんとか命はつないでいるようだが。

この地下室には扉が一つしかない、まるで入り込んだものを決して逃さないと言わんばかりに。

そしてその扉の前にじぐくのもんばんの「」とく立ちふさがる黒い影。

「うふふ~、まあ後はウイル、あなただけよ~。」

我が母、レイがその手にロープを持ち微笑を浮かべながら立つている。

本当にやがてことになってしまったんだがつ……

時は少し遡る、俺とアリストはいつものように部屋で勉強をしていたのだが、急に母さんが。

「ちよっと一人ともこっちに来てくれないかしら~。」

といつもの調子で呼んだので、居間に行くと、こちからちかへ、と俺達を押す形である部屋の前まで連れていった。

そこは家にある地下室の前、ここは昔母さんから立ち入り禁止令が出ていたため俺は今まで入ったことはなかったのだが、アリストは知っていたらしく。

「ヒィッ！？」「ここはー？今度は何をするつもりなんですか！ボクまじめに勉強してましたよー？」

「ものす！」に拒絶反応を示していたことからおそらくこれはお仕置き部屋なのだらう。

ところがなぜ今回は俺まで？別にいい子であったとは言わないが特に悪いことをした記憶もないんだが……

だがアリストほどではないがこの部屋は危険な気がする、入ってはいけないと俺の中の本能が告げている。

正直逃げ出したかったのだが、母さんに押される形でここまで来たので後ろに母さんとアリストがいる、つまり動くに動けない。どうしたものかと悩んでいると背中を押され、部屋の中に強制的に入室させられた。

バランスを崩し倒れる俺、そしてその上にかぶさるよつて同じく倒れるアリスト。

「いたた…、大丈夫、ウイル？」

「ああ、大丈夫だから俺の上からどこでくれ。」

「あ、ごめんね、すぐよけるねつて…上？あれ？この体制…もしかしてボク今ウイルの上で…」

急にぼそぼそとなにか言いながらつむくアリスト、いいから早くどこでくれ。

立ち上がり初めて入った地下室の中を見回すと気になるものを2つ見つけた。

ひとつは天井からぶら下がつていて「レイのぱーふぇくと呪文教室」と書かれた垂れ幕。

そしてもうひとつはその下にロープでぐるぐる巻きにされた転がつている父さんである。

全く状況が飲み込めずぽかんとしていると母さんが宣言した。

「今日は普段の勉強の成果を確かめるために試験をします～。」

時たまこいつしてどれだけ学習した内容が身についているのか確認するのには気を引き締める意味でもいいことりしー。

抜き打ちになつたのはたまたままたさつき思いついたからだそつである。

「なるほど、それはいい考えだな。それで俺はなんでこんな所に縛られて転がされてるんだ？」

父さんが言つ、確かに試験をするだけなりにいる意味はないはずだ。

「うふふ～、それは、これのためで～す。」

そつ壇つり壇から小瓶を取り出す母さん。

中には何やら液体が入つてゐるのだが、色がおかしい、虹色に輝いてこる。あんな液体この世に存在していいものなのかな？

しかしそれを見た瞬間父さんとアリストの動きがピタッと止まる。

「ま、まさか…。」

「それは…。」

妙に汗をかいて焦りだす一人、それに答える母さん。

「わつで～す、先日といつ完成した私特製ドリンク、その名も虹色七号で～す。」

小瓶の中を軽く揺すりながらこじこじと壇つ母さん。中の液体が搖れるたびにキラキラと光つてこる。

ん?七号つてことは一~六号もあつたのか?

「あつたわよ~、ね?パパ、アリストちゃん?」

その言葉に煤けた顔であ、ああ…、そつですね…と答える一人、どうやら聞かないほうが良かつたようだ。
で?その虹色七号をどうするの?

「決まつてるじゃない~、パパにはこれを飲んだらどうなるかじつけ…問題不正解者がどうなるかを見せてあげよ!と思つて~。」

「今完全に本音が出たよな!~ていうか本音じゃなくとも俺がひどい田にあつこどが決定してるじゃねえか!~」

離せ~!と体を動かし拘束から抜けだそうとしている父さん、言つちや悪いが芋虫みたいだ。

「無駄よ~、そのロープ意思があるから、それにパパも問題に正解すればいいだけの話しよ~。」

なるほど、父さんにも救済措置があるわけか。

といふかなんだ意思のあるロープつて、後で聞いたら昔鍊金術にはまつていた時に作ったものらしい。本当に何者だこの人は?

「問題は全部で5問、全て呪文関係の問題で1問でも間違えたらその場で失格となります。」

「よし、俺は逃げない!どこからでもかかつて!」

おお、格好いいぞ父さん、芋虫状態でなければ。

「では第1問へ、氷結系の一番初步の呪文の名前は～？」

「ブリザドだ！」

「は～～不正解で～す。では実験、もと～に闘ゲームで～す。」

「…………。時が止まつた。

「もう実験を否定する氣すらないのかよ～～つてちょっと待て！俺
間違つたのか～～あつてゐだろ～～や、やめろ…来るな～ぬわーー
-----」

まるで息子を人質に取られ身動きがとれなくなつたといひにメラゾ
ーマを食らつたよつた悲鳴を上げ倒れる父さん、いや、息子健在だ
けどさ。

「さて次はアリストちゃんの番ね～。」

そう言われ恐怖が身を包んだのか下を向くアリスト、しばらく何か
を考えていたようだが、顔を上げると何かを決意したような顔で俺
の方を向いて言つた。

「ねえウィル…ボク、ここから無事に帰ることができたら君に伝え
たい言葉があるんだ、聞いてくれるかな…？」

急に言われて思わず、お、おうと答え、それを聞いたアリストが母

さんの方に向き直り、お願いします!と言つた。

といふかアリスト、その言い回しはとても危険な香りがする。生存率がほぼ0%になりそうな意味で。

「第1問～、まほづつかいが最初に覚える呪文は～？」

「メラです！」

「せいか～い！では第2問、爆発系の初步呪文は～？」

「イオです！」

立て続けに2問正解、いい調子だ、頑張れアリスト！

「では第3問～、氷結系の呪文は全部で何種類あるでしょ～？」

「えーと、氷結系はヒヤド、ヒヤダルゴ、マヒヤドだから…3種類です！」

…あ。

「不正解）、ヒヤダインを忘れてます。」

そりなんだよなー、なぜか氷結系は4種類あるんだよな、しかもヒヤダインのみ効果範囲が広い。

それにして一人とも氷結系の問題で失格とは…きっとトライウマにいるに違いない。

逃げても無駄と判断したのか母さんから小瓶を受け取るアリスト、その顔は捨てられた子猫のようである。

最後にちらりとこっちを見て、ボクと友だちでいてくれてありがとう…と言ひと中身を飲み干し、そのまま倒れ物言わぬ物体となつた。

そうして畠頭に戻るわけである。

先に犠牲になつた二人の様子を見るにアレは人が手を出してもいけないものに違いない、なんとしても正解しなければ。幸い初めての試験だからかはわからないが、そこまで難易度の高い問題は出ていない。普段勉強しているなら平気なはずだ。

「では第1問～、どうぞぐがフロー／＼を覚える」
「は？」

「L／＼10だ！」

「正解～、では第2問、爆発系最強の呪文は～？」

「イオナズンだ！」

「正解～、ウイルには簡単すぎるかしらね～、では第3問～スクルトの効果と覚えるしょくぎょう、L／＼を答えなさい～。」

難易度が急に上がつた！？いきなり3つも答えなければいけないと
は、てかこれで3～5問でいいじゃん！
だがまあこのくらいならまだ大丈夫！

「効果は味方全員の守備力上昇！覚えるのはまほうつかいとけんじ

やー！」→はびひらむりだ！

「せいか～いー。さすがねウイル～、母さん嬉しいわ～。では第4問、ルーラとコレミーの違いを説明しなさい～。」

お、ちょっと易しくなつたな、旅人の必須呪文を間違えよつもない、とつそくは覚えないけどね！

「ルーラは訪れたことのある町に一瞬で移動する、リコレミーは洞窟などから瞬時に脱出するー！」

「正解～、ちなみに洞窟でルーラ使つと頭ぶつけるから気をつけとね～。」

パパとママは洞窟で頭打つて倒れてたママをパパが助けてくれたのが出会いのよ～、と二人の馴れ初めを語ってくれた。

なんというかもう言葉に出来ない…母さんのことだから頭を打つたのは初めてではないはずだ、だからちょっとネジが外れてるのか？

「なんか今失礼なこと考えてたわね～？では第5問～、二フラムとバシリーラの共通点を述べなさい～。」

うおっ！心を読まれたのかいきなり難易度上がりすぎだろー！？しかもなんだその問題、全くわからんぞ！？

待て待て、落ち着いて考えよつ、まずは2つの呪文の効果は…
二フラム…聖なる力で敵を消し去る。
バシリーラ…敵をどこかへ飛ばす。
だつたはずだ。

覚えるのはレバは違つものやつじょとけんじや、これは一瞬共通点かと思つたが、二フラムはゆひしゃも覚えるはずだ。

なでしきと引ひ掛け問題になつてゐるはず、だまされないぜ、母さん。

ならば効果か？だが二フラムは敵を消すのに対しバシルーラはどうかにやつてしまつだけ、根本が違う。

…ん？ 根本？

そういうえば2つとも戦闘を強制的に終了させる効果だよな？でも2つとも実際に戦闘を行うわけじゃない…そこから導き出される回答は…

「わかつた！2つとも魔物と戦つた経験にはカウントされない！」

「せいか～い！結構悩んでいたみたいだけどよくわかつたわね～、偉いわよ～。」

そう言つて抱きしめられ、頭をなでられた。ちょっと恥ずかしいが褒めてくれたことは嬉しい。

そしてなにより虹色七号の餌食にならずに済んだ自分に心から賞賛を贈りたい。

これからも氣を抜かずに勉強は続けることにしよう。

「ああ～、おやつも用意してあるしあの休憩にしまじょうか～。

「

そつぱつて部屋から出していく俺と母さん、今日のおやつせこつむり美味しく感じられるのである。

地下室に取り残された2つの物体、その片方がつめき壙のようなものを受けた。

「アリスト…生きてるか?」

「はい、なんとか…。」

「なんで俺はこうなったかいまだに分からんんだが…。」

「ロックさんはせめて氷結系くらいは抑えておいたほうがいいですよ、人のことは言えないけど…。」

二人の男たちが、氷結系を極めようと決心した日でもあった。

第八話（後書き）

とこう訳で試験編でした。

レイさん当初こんなに強力なキャラではなかつたんですがいつの間にかこんなことに。

そろそろ戦闘訓練もはじめらればと思ひます。

冒険は…まだ先かなあ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8167y/>

Lv20

2011年11月26日19時06分発行